Ⅱ−2

沖縄と福建における亀甲墓をめぐる比較研究

―沖縄における受容と展開を中心として―

小熊　誠

1　はじめに

現代の沖縄における墓の一つの特徴は、外形上さまざまな墓型が存在することである。沖縄における墓型の分類についてはいくつかの説があるが、名嘉真宜勝の分類がその基本となっている。まず、墓の立地と外形から、横穴式と平地式に大きく二分類される。横穴式は、さらに洞穴式と掘り込み式に分類され、平地式は家形式と箱型式に分類される。その下がさらに分類され、分類の第三階層では12の形式に分類される（図1参照）（名嘉真・高宮 1975：182）。この分類は、宮古地域に特有のミャーカなども含み、沖縄県全体の墓を対象としており、地域によってはこのすべての形式を含むわけではない。

本論で対象とする亀甲墓は、上記の分類でいくと、横穴式の掘り込み式に分類される壁龕墓、亀甲墓、破風墓、掘り込み墓の一つの形式として分類されている。実際には、コンクリートで作られる近年の平地式にも、亀甲墓はある。したがって、墓型の分類については、その後多くの研究が展開されている[1]。

問題は、多くの墓型があるなかで、亀甲墓だけが外来の文化の影響があると考えられていることである。その指摘は、すでに柳田国男によって行われている。「葬制の沿革について」（1929年）において、柳田は、「沖縄の墓制は首里那覇の中心地に於いてすらも、之を外形に由って支那式の採用と、即断することは出来ぬといふことが其一條である」（柳田 1969：512）と述べている。亀甲墓と明言はしていないが、それを指していることは確かである。しかし、その外形が中国の影響を受けていることについて、それが沖縄の墓の本質ではなく、それが「一族門党」で使用されることに沖縄の墓の構造的特徴があると柳田は看破していた。

さらに、沖縄の墓のもう一つの特徴が指摘されている。墓の構造が大きいという点である。柳田は、「一族郎党」による使用を理由に挙げているが、沖縄の伝統的な墓の使用は集団によるものであった。個人墓が基本である中国の墓とはここに大きな違いがあるが、墓の大きさによる違いは、両地域における葬制と墓制の違いから来るもので、単なる外形の類似による比較だけでは本質をとらえることはできない。

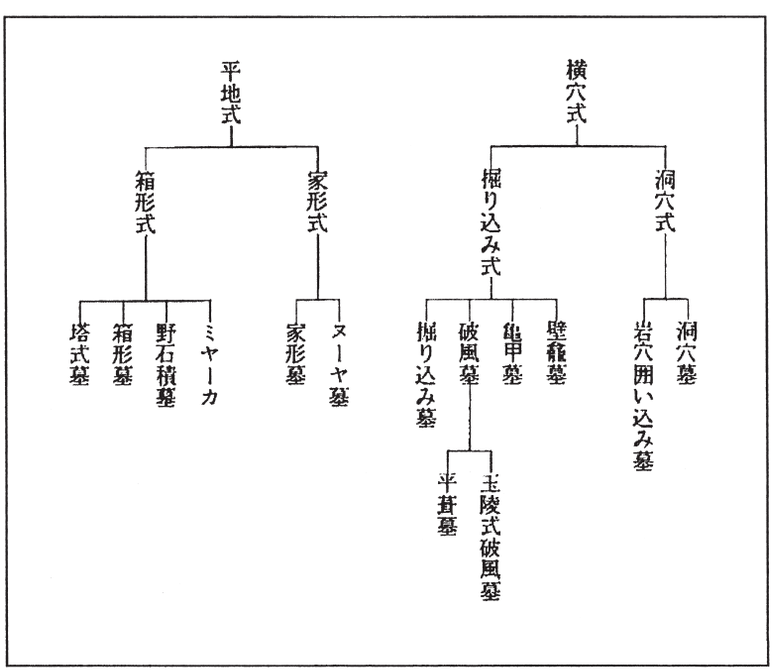


図1　沖縄の墓型の分類（名嘉真　1975：182）

その後の沖縄における墓の研究は、風葬と洗骨という葬法の問題と墓型の変遷の問題に分かれていったと考えられる。亀甲墓の研究は、後者の研究課題の中で扱われてきた。小川徹は、「崖葬墓」「掘取墓」「破風墓」「亀甲墓」を取り上げ、その変遷を考察した後、亀甲墓について「琉球王国が、本土の近世封建社会の影響下に置かれ、士族門中制が確立される過程での社会事物の一環として誕生したものであるが、意匠並びに風水観念を受容することにおいて、一面において中国的な性格を具備するものであった」[2]と述べている。

つまり、近世琉球社会において、士族門中制が成立する過程で、亀甲墓の「意匠」が「風水観念」とともに士族社会に受け入れられたことが指摘された。この指摘は、亀甲墓の導入時期とその状況を明らかにしたという点で重要である。しかし、物質文化の視点から亀甲墓を研究しようとするには、その構造にはほとんど触れられていない小川の論考はあまり有効性をもたない。

墓の形態と構造について、実証的に研究を進めたのは平敷令治であった（平敷1995）。平敷は、実地調査から得た数多くの墓の事例と歴史資料を付き合わせることによって、亀甲墓の成立と展開を論じた。併せて、台湾漢人の墓調査を行っている。平敷は、この両者の調査と研究を推し進めて、亀甲墓の沖縄と中国における比較研究を準備していたのではないかと考えられるが、残念ながらその仕事を達成する前に逝去されている。

そこで本稿は、平敷の論考をもとに整理する形で、亀甲墓の墓型がいつどのような理由で沖縄に導入されたのかを述べる。さらに、沖縄の亀甲墓と中国福建の墓との構造的な違いを比較し、葬法や墓制、墓の使用形態などとの関連で両地域における亀甲墓の相違を歴史と物質文化などから総合的に検討する。

2　亀甲墓の琉球社会への導入

亀甲墓が沖縄に出現するのは、17世紀以降である。それ以前に制作年代の明らかな墓は、第二尚氏の初代、尚円王のために造られた王家の墓所である玉陵（たまうどぅん）である（写真1）。尚円王の息子尚真王が、1501年に造営したと記録されている。玉陵は、首里城入り口の守礼の門の下側にあり、岩を掘り込んで三つの墓室を持つ巨大な墓所である。前面は石積みで、破風の形態をした屋根を持つ破風墓である。中央の墓室は、洗骨まで棺を安置する場所で、洗骨後に骨壺を左右の墓室に振り分けて安置してある。いわゆる風葬に対応した墓の構造をしている。それは、内部構造として横穴の空洞をもつという事である。これが、沖縄の墓構造の最も基本的な要素である。この点は、後で議論する。



写真1　玉陵

亀甲墓が造られるようになるのは、17世紀後半以降である。東恩納寬惇が伊江家の墓を最初の亀甲墓であると推定したことについて平敷令治は紹介している（平敷1995：372）。その墓は、

明清交替期の当時、琉球に渡来していた中国人の曾得魯によって、風水を見て造営されたと伝えられている。『向姓家譜』（伊江家）によると、「本年父朝敷呈請墳地五反八畝二十三歩于西原間切儀保境内経営未成予継父之志修作墳墓而誌箴曰撰於勝地安厝祖先則子々孫々自然榮昌然命運不常譬値衰微雖受飢寒之苦而軽忽祖塋放棄園地則不考（ママ）之罪不勝指屈矣」と記載されている（那覇市企画部市史編集室 1982：329）。この記事は、伊江家五世朝嘉（1652－1717）の康熙二十六（1687）年の条に書かれている。朝嘉の父である朝敷が申請していた墓地に、その意思を継いだ朝嘉が墓を造営したという記録である。場所は、西原間切儀保と記され、現在の那覇市首里石嶺にその墓は現存する。「撰於勝地」と記され、その墓は勝地を選んだとされている。つまり、風水を看て造営されたことが伺える。

首里士族の『毛氏家譜』（豊見城家）に、その一族の始祖である護佐丸の墓を 1686 年に造営したという記録がある。その記録は、以下のようになっている。

> 護佐丸被成御切腹候岩下風水能有之、御墓所作立、御霊骨奉安置候処、右御墓崩積仕候付、康熙二十五年丙寅年、久米村蔡氏大田親雲上中城間切城之側霊地被見立候而、墓所奉訟、一門中二而作替、御霊骨奉移候（下略）[3]

護佐丸は、古琉球における歴史上の人物で、中城城の按司であった。第一尚氏六代目の王である尚泰久の時代、有力な按司（豪族）であった護佐丸が勝連按司であった阿麻和利に急襲され、1458 年に自害したという記録がある。その後、阿麻和利も尚泰久に滅ぼされ、尚氏による中央集権化が進む。護佐丸の子孫による「毛氏由来記」などによると、その遺児が乳母によって助けられ、その後尚氏によって召抱えられた。毛という氏を与えられて、琉球王府の有力な士族の系統となった。

さて、上の記録によると、護佐丸は自害した後岩陰に墓所を作り、その遺骨を安置していたという。その場所が「風水」ありと記されているが、当時風水を見たわけではなく、この家譜が書かれた 17 世紀末の解釈と考えられる。その墓が崩れたので、康熙二十五（1686）年に毛氏一門によって墓を造り替えて、遺骨を移したと記されている。その墓は、現在も中城城の東側の斜面に残されている（写真 2）。外形は、明らかに亀甲墓である。

平敷令治は、家譜資料を用いて、護佐丸の墓が記録上最初の亀甲墓であることを指摘した。亀甲墓について上記 2 例の他に具志川御殿の末吉の墓（1691－1724 年）、梁氏（小宗梁邦基）の墓（1753 年）、鄭姓（小宗鄭士紳）の墓（1766 年）を紹介している（平敷 1995：374－379）。

護佐丸を始祖とする毛氏豊見城家の支流に、毛氏伊野波家がある。毛氏六世豊見城親方盛良の二男伊野波親方盛紀が分家して伊野波家の家系を立てた。その子孫である、毛氏十世伊野波家四代の盛祥が、初代盛良以下



写真 2　護佐丸の墓

の遺骨を移して、那覇市の繁田川に墓を造った[4]。その墓は、1945年の沖縄戦で破壊されたが、それをもとに1970年に改修されて元の場所に現存する（写真3）。盛祥は、康熙二十三（1684）年生まれで、乾隆十二（1747）年卒であるから、18世紀初めに建てられた墓であり、これも亀甲墓である。

以上の諸例から、琉球において亀甲墓は、1600年代後半以降に作られていったことがうかがえる。では、どのような経緯で亀甲の形態が琉球士族社会に受け入れられていったのか。平敷令治は、その経緯を風水の導入と関連させている。

上述の護佐丸の墓に関する家譜の記載の後半に、墓の風水に関する記述がある。久米村蔡氏大田親雲上に墓の風水を看てもらったという内容である。その人物は、蔡応瑞（1651－1707）という久米村系士族で、康熙十八（1679）年に王府の公費で福州に留学し、3年間風水を学んで帰国している。いわば、王府公認の風水師であった。その蔡応瑞が風水を看て造ったのが護佐丸の墓であり、それが亀甲の形をしている。風水も、亀甲墓も、福州に留学した風水師によって琉球士族社会に導入されたことが分かる（平敷1995：379－387）。



写真3　毛氏伊野波家の亀甲墓

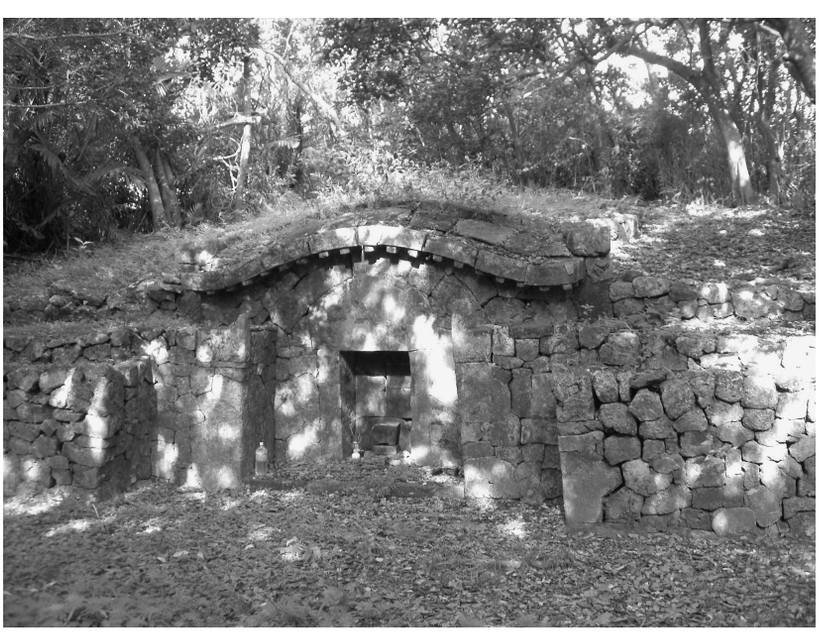


写真4　久米島小港松原墓

蔡応瑞の後継者として、その死後1年後の康熙四十七（1708）年に蔡温（1682－1761）が風水を学ぶために福州に留学する。康熙五十五（1716）年、蔡温が2度目に福州へ渡る途中、風待ちのために久米島に逗留したとき、久米島の山城親雲上昌敷に頼まれて墓の風水を看ている。それが小港松原墓であり、原初的な亀甲墓の形をしている（写真4）。つまり、当時の風水師を通して離島や地方の役人層に亀甲墓が受け入れられていったことを示している（平敷1995：385）。

さて、17世紀末以降に琉球士族社会で亀甲墓の墓型が受け入れられていくという、亀甲墓の導入時期はほぼ明らかになっているが、しかし、それ以降造られるすべての墓の型が亀甲であったわけではない。平敷によると、士族の家譜などに記録され

た、風水を看て造られた近世士族の墓（そのうち 4 例は久米島の地方役人の墓である）31 例中、亀甲墓は 9 例にしかすぎない（平敷 1995：384）。その他は、それ以前からある破風墓や平葺墓の墓型であったと考えられる。つまり、琉球における墓型は、ある時代に一斉に亀甲墓に変化していったのではなく、従来の墓型で造る場合もあれば、中国から移入された新しい墓型である亀甲墓で造る場合もあった。新旧の墓型が併存していたのである。

これは、亀甲墓の墓型が、選択的に受け入れられていたことを意味する。では、亀甲墓の形態がなぜ受け入れられたのかを、その型式の変遷をみながら考えていく。

3　亀甲墓の型式とその意匠

亀甲墓は、斜面を掘り込み、前面を石垣で積み上げ、屋根の部分を丸く亀の甲羅のように仕上げる。このような形式で、屋根の部分を平らにして傾斜をつければ破風墓になる。亀甲墓と破風墓は、屋根の形の違いであって、構造上は双方ほぼ同形といえる。

では、屋根を亀の甲羅の形にすることにどのような意味があったのだろうか。周星は、福建南部の墓を実地調査して、亀の意味についても言及している。福建南部では、亀甲墓を「亀殻墓」と呼ぶ。殻は外側の硬い殻を意味するから、亀殻はまさに亀甲と同義である。福建南部の墓は、墓の頭頂部に実際に亀甲の模様を象ったものもある（写真 5）。亀の意味については、福建と台湾の民間では福、禄、寿、喜、財の意味をもっているという。お祝いでは、米の粉で「寿亀」をつくって福禄寿の祝福を表し、台湾では清明節の墓参りに「紅亀粿」をつくって長寿を意味し、墓参りにきた子どもたちにそれを配るという。また、「墓を亀甲形にすることは、墓穴を『寿壙』と呼ぶことに一致する。福建南部に『亀息』の言い方もあるが、『亀息』は休眠状態、安息の意味である。こうして、亀殻墓は、死者がやすらかに休み、子孫が長生きし、陰宅が陽宅を加護する意味を持つようになった」（周 1996：47）。福建南部の民間では、亀は長寿と安息の意味をもっている。

平敷令治は、閩（福建）や粤（広東）の亀甲の墓の形は、風水観念を具現化したものだと述べている。つまり、塚の外縁は来竜（気が貫いている山なみ）とみなされ、墓碑に接して背後に亀甲状の塚を造るのが一般的で、亀は長寿の象徴であり、玄武を想起させるものと考えた（平敷 1995：387）。つまり、北側



写真 5　泉州近郊の亀甲墓

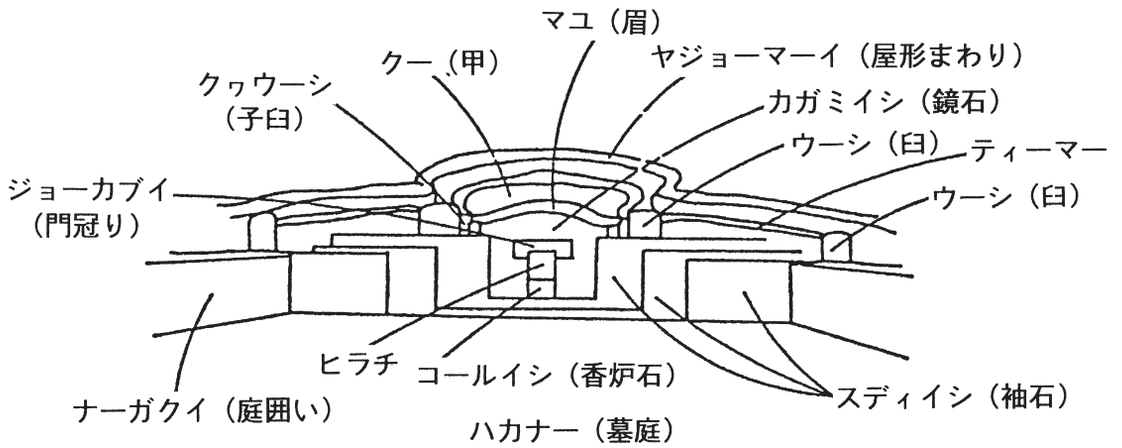


図 2　亀甲墓の正面図（平敷　1995：391）

の玄武が亀甲墓の本体で、左右に出る庭の囲いが左青龍と右白虎、そして墓庭への入口が朱雀という中国古代からの四神相応の観念が亀甲墓全体の配置に象徴されているというのである。このような風水観念と密接に関連する亀甲墓の造営的な構造と、福建における長寿の象徴観念を表す亀形の外形は、当時福建で直接風水を学んできた久米村の風水師たちは十分理解しており、その指導のもとに亀甲墓が造営されたと平敷は指摘している（平敷 1995：387）。

さて、琉球における 17 世紀後半から 18 世紀前半の初期の亀甲墓を見ると、護佐丸の墓（写真 3）や久米島の小港松原墓（写真 4）の形は、墓頂部に亀甲はあるものの、墓前面の意匠が単純な構造になっている。また、前 2 者には頭頂部の亀甲部を囲む屋形まわり（ヤジョーマーイ）がない。その後、士族層において亀甲墓は一定の形式を整えていった。18 世紀における首里士族の亀甲墓の基本形は、ヤージョーマーイ（屋形まわり）、クー（甲）、マユ（眉）、ウーシ（臼）、ティーマー、スディイシ（袖石）であり（図 2）、その他の要素は亀甲墓以外の墓型にも共通すると平敷は指摘している（平敷 1995：390）。

18 世紀以降、亀甲墓の墓型は士族層から地方役人層、そして百姓層にまで普及していったと考えられる。亀甲墓普及の状況に対して、琉球王府は嘉慶十四（1809）年に「田地奉行規模帳」として以下のような規制条文を出している。

> 墓所の儀、成るべき程（は）先祖墓相用、新しく仕立て申さず候て叶わざる節は、山林竿迦より敷場見立、本地方へ相談致し申し出でて候はば、奉行見分の上、諸士は十二間四角、町百姓（は）六間四角、針図仕付、御印紙を以て作調させ候事。
>
> 附、町田舎百姓墓所、亀之甲迄を餅打、其他の飾、亦囲袖石垣無に相用させ候事。（田名、1989：287）

その内容は、墓はなるべく先祖伝来の墓を使うべきだが、どうしても新しい墓を造る場合は、山林の「竿迦（さおはずれ）」、すなわち検知以外の土地をさがし、地元との相談のうえ、奉行見分のうえ、諸士（王府官人層）は十二間角（144 坪）、町方百姓は六間角（36 坪）とし、「針図」（測量図）を提出することとしている。つまり、新たに造営される墓の大きさについて、士族と百姓で区別をつけた。そして、注目すべきは「附」（つけたり）の部分である。つまり、町方と田舎の百姓層の墓所は、亀甲に「餅打ち」（漆喰塗り）をするのはいいが、その他の飾りや囲い袖石垣は禁じられた（田名 1989：287）。

この王府の規制は、亀甲墓そのものを百姓層に禁じたのではなく、その前面にある墓の意匠の部分を百姓層に禁じたということになる。平敷令治は、亀甲部から袖石垣の張り出しの結節点にある円柱状の

ウーシ（臼）と呼ばれる意匠に注目している。台湾の事例で、墓本体と石囲いの伸手の結合部に文筆柱や石獅柱などと呼ばれる飾りを置くことを示し、それは近代以前においては官家のみに許されたと指摘している（平敷、1995：418）。この点から推して、平敷は「王府は亀甲墓を士族にふさわしい新しい形式の墓として位置づけ、閩粤の官戸の墓の伸手柱に相当するウーシなどの飾りを百姓の墓から排除したのであろう」（平敷、1995：390）と述べている。近世士族の墓図には例外なくウーシ（臼）が描かれていると指摘されているが（平敷、1995：388）、久米島上江洲家の美里川墓の墓図にも二対のウーシが描かれている（写真6）。

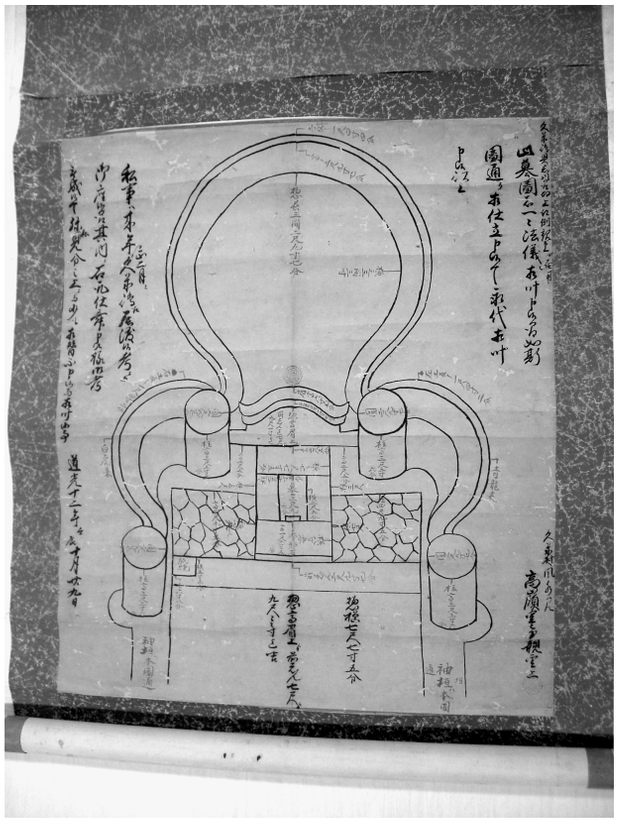


写真6　久米島上江州家美里川墓図（久米島自然文化センター所蔵）

近世琉球において、士族の墓として限定したのは、亀甲墓の墓型やその大きさではなく、ウーシという意匠であったという平敷の指摘は大変重要である。だから、亀甲墓の墓型は百姓層にもありえたし、また士族層の中にも亀甲墓だけでなく破風墓や平葺墓など他の墓型も並行して存在したのである。ただし、百姓層の墓にはウーシは許されず、士族層の墓は亀甲墓でなくてもウーシがあるということになる。

さらに、ウーシの意匠は南中国の文筆柱や石獅柱を置く官人の習慣と共通しているという指摘も注目されるべきである。文筆柱は学問の象徴であり、中国のみならず琉球においても官人層には重要なモチーフである。石獅柱は、台湾の図（図3）を見ると柱の頭部に石獅子がのっている。これは風水に関連して、魔除けの意味がある。沖縄の墓のウーシに石獅子が載っている例はほとんど見られない。ただし、尚王家の墓である玉陵の左右袖塔の上に親子の石獅子が載せられ、墓を守護している。玉陵は、亀甲の

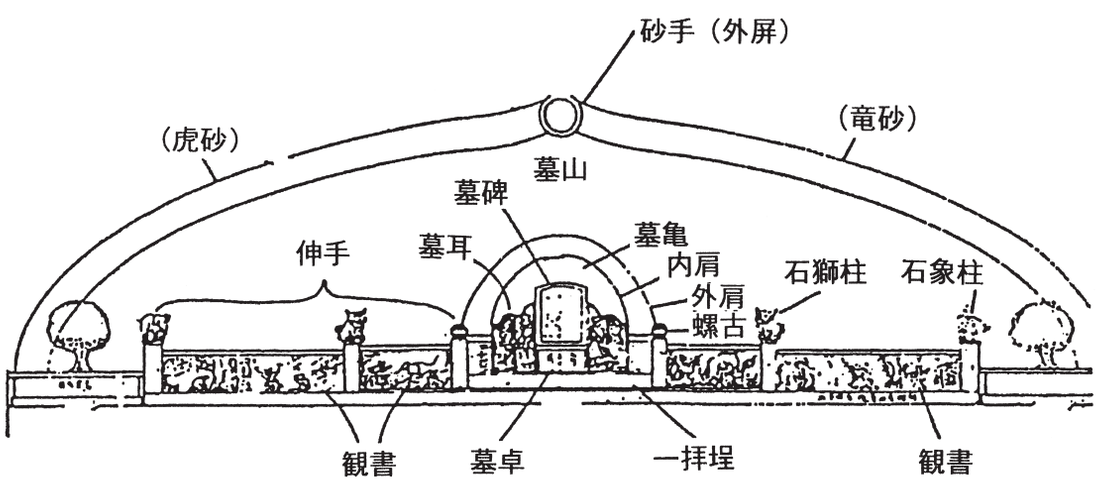


図3　桃園の呂姓佳城の正面図（平敷　1995：391）



写真 7　福建省永定県の亀甲墓

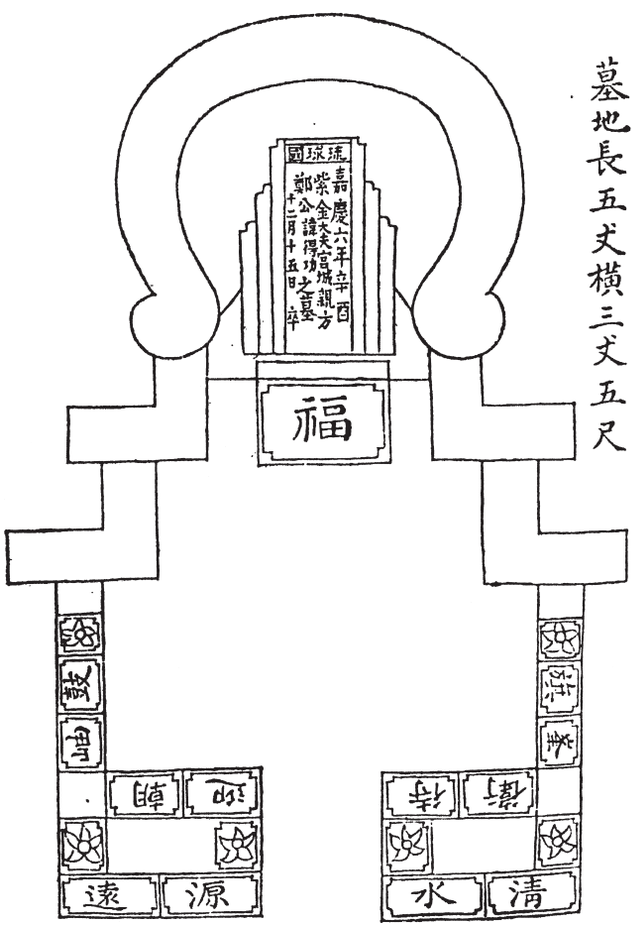


図4　鄭氏十五世得功の墓図（那覇市企画部市史編集室　1980：639）

墓型が琉球に普及する前の墓であるが、ウーシのような円筒とその上の石獅子はその後につけられたものと考えられる。

「ウーシは閩粤系の墓の石筆柱、あるいは石印柱に対応する」（平敷、1995：388）と述べられているが、福建の墓の石柱が琉球の墓のウーシに変化したとは言及されていない。近世琉球においてウーシがどのように創造されて展開していったかについては、いまだ明らかにされたとは言い難い。ただし、台湾、福建の墓に見られる「螺古」の意匠に注意してみるべきだと考えられる。写真 7 は、福建省永定県の客家の墓であるが、墓頂の亀甲を囲む屋形まわりが二重にあり、そこが庭囲いの部分につながる結節点に「螺古」の意匠が見える。円の上に模様が描かれている。これが円柱になると、まさに沖縄の墓のウーシと位置が重なる。

この意匠は、近世の家譜に記載された福建の墓の図にも描かれている（図 4）。鄭氏十五世得功は、嘉慶五（1800）年に冊封謝恩副司として福州に渡った。北京で謝恩の礼を済ませ、福州に戻ってから病没した。そのため、福州の閩江南岸に墓を造り、埋葬された。その墓の図が、家譜に残されている。それによると、永定県の墓のちょうど「螺古」と同じ位置に円形の飾りが見られる。また、「梁氏家譜（九世梁邦基）」の十一世梁廷権の記録に、造墓の図（図 5）がある。その図は、乾隆十八（1753）年の造墓図で、亀甲のほかにウーシと袖石が明確に描かれ、貴重な資料であると平敷は述べている（平敷 1995：376）。

17 世紀後半の護佐丸の墓と伊江家の墓には、ウーシは明確には見えない。しかし、18 世紀中期以降になるとウーシは墓に不

可欠の意匠となっている。この時期に琉球ではウーシの意匠が発達して定着したと考えられる。

4　埋める墓と埋めない墓

福州市の琉球人墓地に残された近世期の琉球人墓をみると、これも家譜に残された墓と墓型が類似している。近世期に福州から琉球にもたらされたのは、まさにこの墓型であった。

1753年に造営された梁氏の墓を再度見てみる（図5）。亀甲の部分は「神亀」と書かれ、内部の大きさは、長さ九尺、幅七尺と書かれている。そして、前面の壁は四尺の高さがあり、その中には、造営者梁廷権の祖父母、父母、兄の5名の遺骨を改葬して移したと記されている。この記事の意味するところは、亀甲の墓室は長さ約3メートル、幅約2メートル、高さ1．3メートル以上もある空洞で、墓室内には複数の祖先の遺骨が収められたということである。一族や家などの複数の遺骨を空洞に収めるという、現在の沖縄における墓の基本的な要件は、この時期すでに整っていた。つまり、「埋めない葬法」に適合した墓の構造になっている。

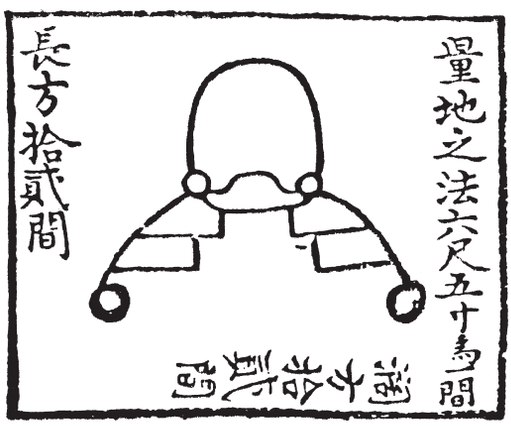


図5　梁氏十一世梁廷権の墓図（那覇市企画部市史編集室　1980：785）

それに対して、福州の琉球人墓は（写真8）、個人の遺骨を地中に埋めて、その上に土を覆って、そこを亀甲の形にするものである。基本は「埋める葬法」つまり埋葬で、個人の墓である。したがって、亀甲の部分はさほど大きくはないし、墓の前面は墓碑を立てるくらいの高さがあれば十分で、墓室の中は空洞にはなっていない。

この点について、沖縄の亀甲墓と「閩粤系の墓の外見は似ているが、子細に見れば両



写真8　福州の琉球人墓

者の間に大きな差異がある」（平敷 1995：390）と平敷令治は述べている。それは、沖縄の亀甲墓は、南中国の墓亀型に比べて、墓の前面が高いという形態の違いを指摘している。

この形態の差は、亀甲部の下におおきな墓壙の空間があるかないかの違いである。琉球・沖縄の葬法は、遺体を埋めずに穴の中で風化させる。一定の期間が経たら、それを取り出して遺骨をきれいにして骨壺に入れ替え、それを墓に安置する。いわゆる洗骨改葬の習俗があり、墓の形態もそれに対応している。

洗骨改葬に対応した古い墓は、岩陰や自然洞穴が利用された。その後、崖を掘り抜くなど人工的に空洞を作る型式の墓に変化した。それが、さらに平地に壁と屋根を築いて空洞をつくる墓に変化していった。遺体や遺骨は埋めずに空洞に置くという観念は、琉球・沖縄の葬法の基本であり、これは少なくとも近世以降から一貫しており、現在も変化していない。しかし、墓はそれを実現する方法として自然洞穴から掘り込み式、そして平地式と変遷していった。墓の外形は、掘り込み式にしろ平地式にしろ、破風型、平葺型、亀甲型（家型は平地式が加わる）のいずれの墓型も可能であるし、近世から現代にいたるまでそれらの墓型のいずれかが個々に選択されてきたのである。墓型が、「崖葬墓」「掘取墓」「破風墓」「亀甲墓」と変遷してきたのではなく、その初出はこの順で古いと思われるが、近世以降それらの墓型は併存してきた。変遷したのは、洞穴墓を含んだ横穴式から平地式という立地と工法であると考えた方が、実態に適合している。

さらに、琉球・沖縄の墓の特徴として、基本的に一次葬墓と二次葬墓が合体して一つの墓に両方の機能が備わっている点があげられる。遺体を入れた棺をそのまま墓口から墓壙の内部に入れ、数年間安置して風化をまつ。その後、遺体を墓から出して洗骨し、骨壺に入れなおして遺骨として再び同じ墓口から墓壙内部に安置する。それを家族や一族で繰り返すのである。したがって、琉球・沖縄の墓は、大きな墓壙が必要である。洗骨前の遺体を置く一次葬墓と洗骨後の遺骨を置く二次葬墓が一体になった人工的な墓は、1501 年に造営された玉陵が代表的である。それ以降の墓も、「埋めない葬法」の考え方に則っているため、一定の大きさの空間をもつということは、近世を通して現代までも一貫している。

中国の葬法は、基本的に埋葬である。中国南部には、洗骨改葬の習慣がある（蔡 2004）。福建の南部でも、遺体を棺に入れて一次葬墓に埋葬し、数年以上たった後に改葬する。遺骨を拾って紙などできれいに拭き、骨壺に入れなおして、二次葬墓に埋める。一次葬墓は比較的簡単な埋葬墓（写真 9）であるが、二次葬墓は永久的な埋葬墓であるので、かならず風水師に看てもらい、亀甲の形で造られる。被葬者は、個人が基本であり、夫婦か兄弟、まれに三人の合葬の場合もあるという（蔡 2004：137）。



写真 9　福建の第一次葬墓

中国南部では、洗骨改葬

を伴った個人あるいは夫婦による埋葬が葬法の基本となっている。近世期の福州においても、基本はそうであったと考えられる。したがって、福州の琉球人墓地に残されているような比較的規模の小さな墓で、墓型は亀甲墓であるが、亀甲の大きさは一つの骨壺が入る程度で、埋葬であるから亀甲の部分の高さも墓碑をはめ込む2尺程度である。

南中国の福州における「埋める墓」は、個人の遺骨を埋めるため亀甲の規模がそれほど大きくはなかったのに対し、琉球の「埋めない墓」は、遺体を安置する一次葬と洗骨改葬後の複数の骨壺を安置するという二つの機能をもつために亀甲の部分は比較的大きな墓壙が必要であった。

5　まとめ

近世期における福州の墓に関する情報は、福州で風水を学んだ風水師だけでなく、福州に渡って帰国した多くの士族が見聞した知識として琉球に持ち帰っていたと思われる。17世紀後半に、琉球士族の中で風水師に頼んで墓を造るようになった。その風水師は、福州で風水を学んで帰国した久米系士族で、彼らは福州の墓型である亀甲を琉球の一つの墓型として導入した。しかし、「埋める墓」と「埋めない墓」という葬法の違いと、その中に入れる骨壺数の違いがあって、福州の墓と同じものを琉球に造ることは不可能であった。むしろ、当時琉球にあった掘り込み式の破風墓や平葺墓と同じ墓壙の構造をもったまま、墓壙の天井部に亀甲の形をあてはめて亀甲墓の型式を創り上げ、それをまず士族層が受け入れたと考えられる。1800年前後には、亀甲墓の墓型は地方役人や百姓層にも受け入れられていった。

しかし、士族層にとって重要で、百姓層に禁止することで士族の身分的な優位性を示そうとしたのは、亀甲墓という墓型ではなく、それに付随したウーシという意匠であった。ウーシに対応するものとして、台湾の石獅柱や文筆柱あるいは台湾、福建の「螺古」が考えられるが、それがウーシの原型であるかどうかはまだ明らかではない。18世紀以降における琉球の墓の意匠として特徴的に展開したものと考えられる。

また、亀甲の意味は、南中国では長寿の象徴あるいは風水的解釈では玄武の具象と考えられるが、琉球・沖縄では亀甲に対して同様の解釈がされていたかどうかはまだ明らかにされていない。

琉球・沖縄の亀甲墓は、近世において福州の墓型が導入されたのは間違いない。しかし、墓の構造や使用方法は、伝統的な琉球の葬制と墓制が維持されることによって変化することはなかった。つまり、①「埋めない葬法」、②洗骨改葬に伴う一時葬墓と二次葬墓の双方の機能をもつという墓制、③さらに一つの墓が集団によって使用されるために多くの骨壺を安置するという墓の所有と使用。近世以降の琉球・沖縄における亀甲墓は、以上の三つの特徴から大きな墓壙をもつという墓の構造を変化させることなく、外形の亀甲の意匠が部分的に導入されることによって一つの墓型として導入されていったのである。

そのために、亀甲の墓型は福建の墓と類似するが、その構造と使用方法は異なるという認識が、柳田国男以来繰り返されてきたのである。

註

1　前田2011によると、沖縄における墓型の研究がまとめられている。
2　小川1987：218。初出は、『法政大学文学部紀要』13、1968年。
3　平敷1995：374に掲載。原本は、琉球大学図書館蔵。
4　伊野波盛栄編集の『毛氏支流伊野波本家　墳墓改修記念誌』1975年、49頁の記載による。

参考文献

久米島西銘誌編集委員会　2003 『久米島西銘誌』
蔡文高　2004 『洗骨改葬の比較民俗学的研究』岩田書院
周星（何彬・小熊訳） 1996 「椅子墓と亀殻墓」『南島文化』18、沖縄国際大学南島文化研究所
田名真之　1989 「墓―歴史的視点から見た諸相」『新琉球史―近世史編（上）―』琉球新報社
名嘉真宜勝・高宮廣衞　1975 「沖縄の墓地―主として亀甲墓について―」森浩一編『日本古代文化の探求　墓地』社会思想社
那覇市企画部市史編集室　1980 『那覇市史　資料篇第１巻６家譜資料二（久米村系家譜）』
那覇市企画部市史編集室　1982 『那覇市史　資料篇第１巻７家譜資料三（首里系家譜）』
平敷令治　1995 『沖縄の祖先祭祀』第一書房
前田一舟　2011 「墓の型式とその変遷―沖縄本島中部・屋慶名の事例―」『沖縄国際大学社会文化研究』12－2
柳田国男　1969 「葬制の沿革について」『定本柳田國男集』第十五巻、筑摩書房